

曖昧さへの態度と社会的比較傾向との関連

問題・目的

本研究の目的は、他人と自分とを比べる傾向の個人差に影響を与える要因を明らかにすることである。自分が他者と比べて劣っているのか優れているのか善いのか悪いのかなど、常にはっきりとしていないとすまないという「曖昧さ」に対して否定的な者ほど比較傾向は高く、曖昧さへ肯定的な者ほど比較傾向は低いという仮説を検討した。

方法

大学生男女 160 名を対象に 2 つの尺度を使用し web 経由で調査を行った。1 つは「社会的比較志向性尺度」で、「能力比較」因子(自分の能力に関する他者との比較)と「意見比較」因子(自分の意見に関する他者との比較)で構成され、5 件法である。もう 1 つは「曖昧さへの態度尺度」で、「曖昧さの享受」因子(曖昧さを享受する態度)、「曖昧さへの不安」因子(曖昧さに情緒的混乱を示す態度)、「曖昧さの受容」因子(曖昧さがあるがままたま受け入れる態度)、「曖昧さの統制」因子(曖昧さを認知的に統制・処理しようとする態度)、「曖昧さの排除」因子(曖昧さを排除しようとする態度)で構成され、6 件法である。「不安」・「統制」・「排除」は曖昧さへの否定的態度、「享受」・「受容」は肯定的態度と考えられる。

結果・考察

相関分析の結果、否定的態度の「不安」「統制」「排除」と能力比較・意見比較との間において有意な中程度の正の相関が示された。また肯定的態度の「受容」と能力比較・意見比較との間において有意な弱～中程度の負の相関が示され、ここでは仮説が支持されたと言える。一方「享受」に関しては能力比較・意見比較ともに負の相関は見られず無相関であったことは仮説に反する結果であった。また、2 変数の直接的な関連を見るために偏相関分析を行ったところ、「不安」と意見比較、「受容」と意見比較、「統制」と能力比較、「排除」と能力比較・意見比較との関連が有意ではなくなった。一方「享受」は意見比較との間において仮説とは反対の有意な正の偏相関を示した。そのため、一概に曖昧さへの否定的態度は社会的比較傾向と正の相関関係があり、肯定的態度は比較傾向と負の相関関係があるわけではなく、否定的態度の中でも「不安」と「統制」は異なる分野の比較傾向へと影響を与えている可能性があること、また肯定的態度の中でも「受容」と「享受」も異なる分野の比較傾向へと影響を与えている可能性があることが示唆された。以上より、社会的比較傾向の個人差に影響を与えている要因として「曖昧さへの態度」が関与している可能性を示唆したことが本研究の成果である。

摂食障害傾向と感情制御困難性の関連についての研究

問題・目的

本研究の目的は、摂食障害傾向と感情制御困難性の関連について検討し、摂食障害傾向を持つ者の感情制御における特徴を明らかにすることである。摂食障害傾向を持つ者の感情制御における心理的特性を明らかにすることは、摂食障害や摂食障害傾向を持つ者の支援や早期発見に役立つと考える。

方法

18 から 24 歳の女性計 151 名を対象に Google フォームを用いて調査を行った。摂食障害傾向を測るための尺度として永田・切池・中西・松永・川北(1991)の Symptom Rating Scale for Eating Disorders (SRSED)を用いた。それぞれについて 4 件法で回答を求めた。感情制御困難性を測るための尺度としては山田・杉江(2013)の J-DERS (日本語版感情制御困難性尺度)を用いた。それぞれについて 5 件法で回答を求めた。

結果と考察

摂食障害傾向と感情制御困難性の関連について検討するために、摂食障害傾向、感情制御困難性のそれぞれの下位尺度間における相関を求めた。その結果、摂食障害傾向の「肥満恐怖」・「過食と食事による生活支配」と感情制御困難性のすべての下位尺度との間に有意な正の相関が認められた。すなわち、摂食障害傾向を持つ者が衝動性や自身の苦痛や否定的な感情について非受容的であるといった特性や、コントロールしにくいものへの恐れ、動揺した時に対処法がないといった否定的な信念といった考えを持っていることが明らかになり、摂食障害傾向という不適切な行動をとりやすい者の特徴として、多側面にわたる感情制御困難性を強く感じていると指摘できるだろう。摂食障害傾向の「食べることへの圧力」・「嘔吐」と感情制御困難性のすべての下位尺度の間に関連は認められなかった。摂食障害傾向の「食べることへの圧力」と感情制御困難性のすべての下位尺度に関連が認められなかったことに関しては、摂食障害傾向の食べることへの圧力と感情制御困難性のすべての下位尺度で概念の方向性に違いがあったことが原因であると考えられる。

摂食障害傾向の嘔吐と感情制御困難性のすべての下位尺度に関連が認められなかったことに関しては、摂食障害傾向の過食（過食と食事による生活支配）と嘔吐に症状としての程度に差があったことが考えられる。また、大森（2004）の研究では、摂食障害傾向を持つ者が摂食障害の過食と嘔吐を抑えられる可能性が示唆されており、摂食障害傾向を持つ者が嘔吐を防ぐために過食を調節できる可能性が考えられる。